

4. 寄稿1：国連平和の鐘の原点と次世代への継承

(一般社団法人 国連平和の鐘を守る会 代表 高瀬聖子)

ニューヨーク国連本部の中庭に「平和の鐘」がある。日本独特の檜づくりの重厚な鐘楼に吊るされた日本の梵鐘が、存在感を見せてエンパイアステートビルの景色に溶け込んで見えるのが不思議である。毎年9月の国連平和デーには世界の代表者が集まる中、国連事務総長がこの鐘を鳴らして世界平和を祈る。



1951年、第6回パリ国連総会にまだ加盟を許されない日本の四国の宇和島市から一人の男がオブザーバーとして出席した。各国代表を前に「世界の人びとから硬貨やメダルを頂き、平和の鐘を造り国連に寄贈したい。その鐘を平和の為に鳴らしてもらいたい」と国連事務次長ベンジャミン・コーヘン氏の協力を得て訴えた。参加60余か国の大使の誰からも反対はなく、経済社会理事会で正式に受理された。敗戦国日本の中川千代治という一国民の訴えを世界は受け入れた。奇跡だった。そして中川は総会参加国の代表からコインをもらい、バチカンでローマ法王ピオ12世に拝謁し金貨やメダルを頂き、各国の人々からも硬貨を集めて歩いた。日本では軍刀、各宗派のバッチ等が集まり、小中学生の1円募金など、多くの人々が協力した。

鐘の鑄造は四国の高松市の多田鑄造所に「コインを溶かした平和の鐘」の鑄造を依頼した。多田丈之助氏は未知の鐘造りをするのを拒み強く断るが、千代治の世界平和を願う強い意志と情熱に負けて、ついにコインを溶かした鐘造りを引き受けた。出来上がった鐘の音は心に沁みるような素晴らしい音だった。丈之助氏は代金は受け取らなかった。また、宇和島の宮大工、大下林平氏は千代治の思いに応え、素晴らしい鐘楼を造った。12月の雪降る中、毎朝5時に体を清め、二人の弟子と共に夜の11時まで休む間を惜しんで1週間で造り上げた。大下氏も鐘楼の造作費は取らなかった。多くの人々の平和を願う思いと協力で完成した鐘と鐘楼は、被爆した広島と長崎の一握りの土と共に、1954年、飯野海運の常島丸で横浜港からニューヨークに無償で送られた。その年の6月、国連で平和の鐘の贈呈式が行われた。しかし、財産を使い尽くした中川は、渡航費が工面できず、平和の鐘の贈呈式に出席できなかった。

中川がこれほどまでして平和の鐘を造り国連本部に贈ったその原点は戦争だった。1941年、38歳の中川千代治は2度目の召集令状で、将校としてビルマの戦地に向かった。1年後、部隊は全滅、自らも足を射抜かれ意識を失ったがビルマの仏塔で目を覚まし、一人生き残ったことを知った。中川は苦しみぬいたすえ帰国、そこで待ち受けていたのは広島、長崎への原爆投下の地獄図だった。「戦争ほど愚かなものはない、二度と戦争をしてはいけない。世界中の人の心をつなぐことが世界平和だと考えた。鐘の前面と裏面に「世界絶対平和万歳」と彫りこみ、平和の鐘の音を世界中に響かせることが、人の心を平和に導くことだと信じた。1961年、東西ベルリン危機で世界に不安が広がった時、中川は国連平和の鐘の資材に新たにコインを集めて、国連平和の鐘の4kgの子

鐘を造り、アメリカのケネディ大統領とソ連のフルシチョフ首相に「少しの思いやりと笑顔で世界の平和が保たれる」とのメッセージを添えて贈呈した。



1970年、万国博覧会が大阪で開催されることを知った中川は、世界中から多くの人々が訪れると考え、国連平和の鐘の里帰りを思いついた。63歳になっていた中川だったがニューヨークに飛び、平和の鐘の里帰りをお願いした。快く承知して下さったのは、ビルマ出身のウ・タント国連事務総長だった。不思議なご縁だった。

1970年、大阪万博会場では「平和の鐘」を世界中の多くの人々が打ち鳴らした。また千代治は国連平和の鐘の同資材に新たに集めたコインを入れて1kgの鐘を150個造り、ウ・タント国連事務総長はじめ世界141か国の大使館を自ら廻って平和を訴えて贈呈した。そして8月15日の終戦記念日の正午、千代治が贈ったすべての鐘を一斉に鳴らしてもらい、戦争のない世界を祈った。1971年、万博終了後、平和の鐘は国連本部に戻し、留守番鐘として国連に吊るされていた鐘は戻り、姉妹鐘として大阪万博記念公園に贈呈した。

中川は宇和島市長になっていたが、平和の鐘の活動が途切れることはなく、市制50周年の式典で宇和島市を「世界絶対平和都市」として宣言した。その3か月後の1972年2月、中川千代治は66歳の人生を静かに閉じた。「平和の鐘」一途の生涯だった。

千代治没後43年、「国連平和の鐘」の記事や報道が、間違っただけで伝えられていることを知った。そこには戦争を体験した日本人が、人生のすべてをかけて世界に訴えた「平和の鐘運動」の意味が消えていた。「これではいけない、中川千代治の思いに共感し、協力した多くの人々が平和の鐘に託した願いが消えてしまう」、国連平和の鐘の原点を正しく伝えなければならない。私達は「国連平和の鐘」が何故大切なのかを継承していかなければならないと「国連平和の鐘を守る会」を立ち上げた。



「国連平和の鐘を守る会」は6年間に渡り、学校や地域やイベントなどで講演をして歩き、延べで5,000人を超える人々に平和の鐘の思いや成り立ちを聞いて頂いた。千代治が平和の鐘運動の中心とした各国への平和の鐘の贈呈も続けている。2017年ミャンマー政府、2019年ボスニア・ヘルツェゴビナ政府を訪問し、4kgのレプリカを贈呈した。来年にはサンマリノ共和国に贈呈する予定である。

会の活動の使命の一つとして、毎年ニューヨーク国連本部の鐘打式典に参加し、世界の人々と共に平和を祈り、秋には大阪万博記念公園で平和の鐘の鐘打式典を行っている。平和の鐘の音は永遠に絶やしてはならない。今はコロナの収束を祈り世界平和をみんなで祈ろう。